総合医学会報告

シンポジウム

DPCを用いた医療の質評価の推進

座長　伏見清秀[†]　楠岡英雄[*]

第65回国立病院総合医学会
（平成23年10月8日　於岡山）

IRYO　Vol. 66　No. 12（681－683）2012

要旨　DPC病院が作成している診療データは包括支払いのみではなくさまざまな形の医療評価に利用することができる．国立病院機構本部診療情報分析部は，各病院の機能の特徴や地域での役割の把握に活用できる診療機能分析レポートを作成し，診療と経営の質の改善への支援を目指している．また，厚生労働省「医療の質評価・公表推進事業」で作成された指標や国立病院機構の新臨床評価指標はDPCデータ等から定型的に計測することができる使いやすい臨床評価指標となっており，今後の医療の質改善に寄与できるものと考えられる．

さらに，DPCデータ等を用いた医療分析とその活用を診療の現場で積極的に進めている3病院の取り組みが報告された．複数の病院とのデータ連携により得られた結果をベンチマークとしての利用，DPCデータをプロセス分析のツールとして活用することで医療安全や感染管理にも利用できること，DPCデータ等の利用による現状分析とそれに基づく経営改善へのアプローチ等が紹介された．国立病院機構が掲げる質の高い医療の提供のために，DPCデータやレセプトデータを用いた医療の質評価の推進について，引き続き検討することの重要性が認識された．

キーワード　DPC，診療機能分析，臨床評価指標

はじめに

DPC病院が作成している診療データは，包括支払いのみではなくさまざまな形の医療評価に利用することができる．DPCデータを基に国立病院機構本部診療情報分析部が作成した平成22年度「国立病院機構診療機能分析レポート」は，各病院がその機能の特徴や地域での役割の把握に活用し，診療と経営の質の改善に役立てることを狙いとしている．また，国立病院機構45病院が参加した平成22年度の厚生労働省「医療の質評価・公表等推進事業」で作成された指標の多くは，DPCデータから定型的に計測することができる使いやすい臨床評価指標となっている．

本シンポジウムでは，このようなDPCデータを用いたいろいろな医療評価の意義と活用方法の紹介

国立病院機構本部　総合研究センター　診療情報分析部，†医師　＊国立病院機構大阪医療センター　†医師
別刷請求先：伏見清秀　国立病院機構本部　総合研究センター　診療情報分析　〒152-8621　東京都目黒区東が丘2－5－21
（平成24年5月7日受付，平成24年7月13日受理）
Promotion in the Assessment of Medical Care Quality using DPC Data from the Chairpersons of the Symposium
Kiyohide Fushimi，Hideo Kusuoka，NHO Headquarters Clinical Research Center，＊NHO Osaka Medical Center
Key Words：DPC（Diagnosis Procedure Combination），analysis of clinical function，clinical indicator

を目的とした.

診療機能分析レポート・臨床評価指標

総合研究センター診療情報分析部からは診療機能分析レポートおよび臨床評価指標の概要が報告された.

古場らは「診療情報を活用した病院機能評価の取り組み」と題し，国立病院機構診療機能分析レポートの作成システムと平成22年度の分析について示した．国立病院機構では，平成22年度から全144病院のDPCデータおよびレセプトデータを収集し，「診療情報データバンク」(Medical Information Analysis Databank）として管理・運用している．診療情報分析部はこのデータベースを元に「国立病院機構診療機能分析レポート」を作成している．平成22年度には，DPC施行41病院を対象に，患者数と地域シェアの視点，効率性・複雑性の視点，診療密度の視点，地域連携の視点から，病院ごとに分析した「個別病院版」と全病院を横断的に示した「全国版」を作成した．平成23年度は分析対象を全病院に拡大するとともに，レセプトデータを用いた分析を行う予定である.

小林は「臨床評価指標を活用した医療の質評価」と題し，厚生労働省の「平成22年度医療の質の評価・公表等推進事業」および国立病院機構の「新臨床評価指標事業」における臨床評価指標について示した．厚生労働省の推進事業ではDPC対象病院を対象にプロセス指標とアウトカム指標の算出を行った．新臨床評価事業では全144病院を対象にレセプトデータも使用している．これらの分析結果より，一部の指標において病院間のばらつきが認められ，また，レセプトデータでは評価の対象となる病名の同定に困難があることが明らかとなった.

DPCデータ等を用いた医療分析とその活用

DPCデータ等を用いた医療分析とその活用を診療の現場で積極的に進めている3病院の取り組みが報告された.

石川ら（四国がんセンター）は「CQI研究会の活動と四国がんセンターの取り組みについて」と題してCQI研究会の活動について報告した．Cancer Quality Initiative（CQI）研究会は，がん診療の均てん化への寄与を目的に，四国がんセンター，九州がんセンター等7施設が世話人となって行っている活動で，DPCデータと参加病院へのアンケートによりデータを収集し，GHC（グローバルヘルスコンサルティング・ジャパン）が分析した結果を検討している．主に5大がん（胃がん，肝がん，大腸がん，肺がん，乳がん）を中心に，診療内容や術式の内訳・割合，在院日数，術前術後日数等を分析し，ベンチマークとして利用している.

一番ヶ瀬ら（嬉野医療センター）は「DPCデータから読み取る，周術期抗菌薬の使用状況について」と題し，電子クリティカルパス導入前後における周術期の抗菌薬の投与状況の変化についての検討を報告した．電子カルテを導入に併せてクリティカルパスと周術期抗菌薬の標準化を進め，手術前日から手術後7日目までに使用した抗菌薬（注射薬）の種類・投与期間・投与人数をDPCデータから抽出した．電子クリティカルパスの導入により薬剤種類数の集約化と第1選択薬剤の投与期間の短縮化が進んだことが確認できた.

阿南（九州医療センター）は「DPCデータを用いた診療機能の適正化を図る試み–診療情報を管理する立場から–」と題し，医療情報管理センターにおけるDPCデータ等の活用や経緯について報告した．医事会計データ，診療情報管理データ，DPCデータ等を活用することにより，在院期間のばらつきや一床あたり単価の変動，1人1日あたり診療点数が在院日数に逆相関することなどを確認している．また，医療資源の投入，とくに休日の診療体制が重要であるとの結果を示した.

ま と め

総合研究センター診療情報分析部からは，今後，レセプトデータを用いることでセイフティネット系医療や外来診療の状況に関しても診療機能分析レポートを作成し，患者特性や診療内容に関する集計分析が可能となること，臨床評価指標は医療の質に影響を与える潜在的な問題を発見することに役立ち，各病院における医療の質改善のためのPDCAサイクルに有効と考えられることが示された.

一方，各病院における具体的取り組みからは，複数の病院とのデータ連携により得られた結果をベンチマークとしての利用，DPCデータをプロセス分析のツールとして活用することで医療安全や感染管理にも利用できること，DPCデータ等の利用によ

る現状分析とそれに基づく経営改善へのアプローチ等が示された.

今後も国立病院機構が掲げる質の高い医療の提供のために，DPC データを用いた医療の質評価の推進について，引き続き検討することの重要性が認識された.

〈本論文は第65回国立病院総合医学会シンポジウム「DPC を用いた医療の質評価の推進」で発表した内容を座長としてまとめたものである.〉